
ハロウィン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウィン

【Nコード】

N8428F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ハロウィンのアメリカ。お祭りを楽しもうという子供達の中に混ざったカボチャ頭は。オズシリーズの人気キャラを書いてみました。

第一章

ハロウィン

今日はハロウィンである。それこそアメリカ中がお祭りになる日である。とかく陽気でお祭り好きだという彼等がとりわけ楽しみにしている日である。

子供達はそれぞれ銘々の妖怪や幽霊の格好をして。お菓子をねだりに行く準備にかかっていた。

「ああ、あなたの格好それなの」

「そうなんだ」

日系人の女の子サエコに対して中国系の男の子であるリンチエンが応えていた。見ればサエコは日本の幽霊の白装束に三角の布でありリンチエンがキョンシーの格好である。

「お父さんがこの格好用意してくれてね」

「ふうん、そうなの」

「似合うかな」

あらためてサエコに尋ねるリンチエンだった。

「これで」

「いいんじゃないの？それでボブはそれね」

「うん」

今度は黒人の男の子がサエコの言葉に頷いた。彼は悪魔の格好である。

「これにしたんだ。今年はね」

「いいんじゃないの？似合うわよ」

「そうかな。何か合わないんじゃないかって思うけれど」

「いい感じよ」

少し自信なさげな顔になったボブに対して述べる。

「似合ってるから。安心して」

「だったらいいけれど」

「僕はどうかね」

最後にソバカスが目立つ白人の男の子がサエコに尋ねた。見れば彼はフランケンシュタインである。

「フランケンなんだけれど」

「あんた去年のドラキュラじゃないの」

「趣向を変えてね」

こう答えるのであった。

「それでなんだ」

「去年の方が格好いいけれどね」

「けれどさ。これでも別にいいだろう?」

「まあね。それはね」

サエコは彼の言葉に頷いた。そうは言っても納得はするのだった。

「これでビルがフランケンで」

「あとはカルロスだけだけれど」

ボブが言った。

「あいつまだかな」

「後で合流するって言ってたわよ」

サエコが彼の問いに述べた。

「何でもね」

「ああ、そうなんだ」

「そうよ。だから私達だけで行きましょう」

「よし、それじゃあ」

リンチエンが言う。

「行こうか、皆で」

「ええ、皆でね」

「お菓子を貰いにね」

こうして楽しいお菓子を貰う行脚に出るのであった。まずは適当な家の玄関を叩く。しかしふとその時ボブが皆に言うのであった。

「けれどさ。注意しないとね」

「注意って何が?」

「いや、ここの家の人は知ってるじゃない」

「エマおばさんよ」

サエコ達にいつも優しくしてくれる一人暮らしのお婆さんである。既にそのことは調べて訪問しているのである。彼女達も驚かすというかお菓子をねだる相手は選んでいるのだ。

「だったらいいけれどさ。やっぱり知らない人だと」

「そうそう」

ビルも言うのであった。ここで。

「いきなりドア越しにどかんとね」

「あつたよね、ニユースで」

リンチェンも顔を顰めさせて言うのであった。

「そうなたら洒落にならないからね、やっぱり」

「全く。物騒よね」

サエコもそのことに顔を顰めさせていた。

「銃なんて何がいいかわからないわ」

「自分を守る為だけけどね」

「けれど。そこまでいったら」

「極端なんじゃないかな」

男の子達もそう思うのであった。流石にハロウィンでいきなり撃たれてはたまつたものではない。だからこそ言うのである。

「まあとにかくエマおばさんはそんなことないから」

「安心してお菓子貰えるね」

「何かな、それで」

こうしてとりあえず銃のことを気にしつつお菓子をねだる彼等であつた。

そのお菓子を食べつつ次の家に行つてまたねだつて食べて。三軒程そういうことをしていると彼等のところにオレンジのカボチャに三角の目と鼻、それにギザギザの口の人が来たのであつた。

「ああ、やっと来たよ」

「遅かつたじゃない」

皆はあそのカボチャ頭を見て声をかけるのだった。

「けれどよくここだってわかったわね」

「そうだよ」

サエコとボブが言った。

「やっぱりあれ？追いかけてきたのかな」

「僕達を」

リンチェンとビルはこう考えたが皆もそれは同じだった。こうして彼等はそれで納得してカボチャ頭を迎えるのだった。

「さあ、カルロス」

「カルロスって？」

そのカボチャ頭はサエコに声をかけられて少し驚いた声になっていた。

「僕はジャックだよ」

「ああ、そうね。ジャックね」

彼に合わせてかその言葉に頷くサエコだった。

「そういう役なのね。わかったわ」

「役って。あの、僕は」

「いいからいいから。それにしてもあんたまた徹底してるじゃない
そのカボチャ頭を見て言うのだった。

「よくできてるわよ、そのカボチャ頭」

「そんなに？」

「ええ、雰囲気出てるわよ」

面白そうに笑って彼に言うのだった。

「ハロウィンに相応しいわ」

「そうだよ。やっぱりハロウィンはカボチャだよ」

「そうそう」

男の子達もサエコのその言葉に頷く。ハロウィンといえばカボチャというこのことは既にお約束となっているのである。それもオレ
ンジで顔を作ったカボチャは。

「カルロスも気が利くね」

「それじゃあ一緒にね」

こうしてそのカボチャ頭が何か言おうとする前に彼等は彼を連れて行くのであった。こうして彼等はそのカボチャ頭を先頭にしてお菓子をねだるのであった。

「トリツク＝ザ＝トリート」

「さあ、お菓子頂戴」

「おいおいおい」

最初に彼等の訪問を受けたおじさんがそのカボチャ頭を見て喜んだような顔になった。

「またよくできてるな、そのカボチャ」

「そうでしょ。私達もびっくりしてるのよ」

「カルロスがね」

「作っただよ」

こう笑顔でおじさんに話すのだった。お化けの格好で。

「僕達も驚いてるし」

「だから驚いてよ」

「いやあ、本当に驚いたよ」

おじさんも笑って言う。驚いていることは驚いているがその驚きの内容はかなり違っていた。彼等の怖さに驚いているのではなくカボチャのその出来に驚いているのだ。

「いや、ここまでよくできたカボチャはないよ」

「そ、そうですか」

「カルロスだよな」

おじさんはしきりに褒められて戸惑っているカボチャ頭を見て言った。気のせいかカボチャ頭から直接汗をかいているようにも見えるがそれもよくできたものだと思えていたのだった。

第二章

「御前さんがこんなに手先が器用だとは思わなかったよ」

「カルロスじゃ」

「んっ！？カルロスじゃないのか？」

「そんなわけないですよ」

「なあ」

リンチェンとビルが顔を見合わせて言った。

「だって。約束していたの後はカルロスだし」

「五人でやるってことになったのよ、私達」

ボブとサエコも言うのだった。

「だから。カルロスしかないじゃない」

「それもそうか」

四人の言葉に納得して頷くおじさんだった。

「そうだよな。いつも五人一緒だからな」

「日本のヒーローと同じよ」

サエコがここで少し胸を張って言う。着物の胸がそれで少し反り返って見えた。

「だからこれでいいのよ」

「そうだよな。いや、それにしても」

おじさんはまたカボチャ頭を見て言うのだった。今度はその頭に直接触れてまじまじと見ている。心から感心しているのがよくわかる。

「よくできていますよ。本当にね」

「有り難うございます」

謙遜しながら言葉を返すカボチャ頭であった。こうして何軒か回ってそれでまたお菓子を集める。そのうえでお菓子を公園のベンチで五人で食べるのだった。

「今回はカルロスのおかげね」

「うん、そつだね」

「全くだよ」

公園の大きなベンチで五人並んで座ってお菓子を食べている四人は真ん中に座っているカボチャ頭を見ながらお菓子を食べてつつ笑顔で言い合っていた。

「おかげでこんなにお菓子が集まってるし」

「よくそんなの作ったよ」

彼等もまたそのカボチャ頭を撫でつつ彼を褒めるのであった。

「美味しそうだしね」

「後でこれ食べようか」

「パンプキンパイかな」

アメリカでよく食べられるお菓子の一つである。パイはアメリカではかなりよく食べられている。他にはアップルパイがよく食べられる。

「それがいいよね」

「私あれ大好きなのよ」

「僕も」

「僕もだよ」

皆それは同じだった。誰もがパンプキンパイが好きであった。

「それじゃあそれで決まりだね」

「このカボチャ頭でね」

「後で皆でパンプキンパイにしよう」

「そ、それは困るんだけど」

カボチャ頭は彼等の話を聞いて怯えたような声を出してきた。声を聞いていると心から怯えているのがわかる。何故か恐怖を感じている声であった。

「食べたなら。スペアがないと」

「スペアって!?!」

「何が?」

「だからさ」

カボチャ頭は彼等に応えて言うのであった。

「僕はその。頭が」

「だからその頭を食べるんじゃない」

「そうだよ。ねえ」

「カボチャは食べるもの」

確かにこの言葉は真理ではあった。

「その為にあるものなのに」

「困るってねえ」

「変なカルロス」

カボチャ頭を見つつ言ったサエコであった。

「それにあんたカボチャ大好きじゃない」

「あつ、そういえば確かに」

「カボチャだったら何でも食べるよね」

「そうだったね、そういえば」

男の子達もサエコの言葉で気付くのがあった。カルロスはカボチャが大好物なのである。

「だからいい機会じゃない」

「パンプキンパイ食べようよ、皆でね」

「けれどそれは」

しかし皆の笑顔を見てもまだ困った様子のカボチャ頭であった。

「せめて代えの頭ある？」

「代えって!？」

「何が!？」

「だから頭だよ」

彼はその困った様子でまた皆に言う。

第三章

「スピアがあればいいんだけど」

「何言ってるかわかる？」

「いいや、全然」

「わからないよ」

リンチエンとボブとビルはそれぞれ顔を見合わせてその眉を顰めさせていた。

「代えって何が？」

「トランクスとか言わないでよ」

「まさかとは思うけれど」

「そういうのじゃなくて」

彼は下着のジョークはとりあえずかわした。そしてそのうえでまた述べる。

「だからさ。頭が」

「頭がどうとかってね」

サエコもまた彼の言葉の意味がわからずその首を傾げさせて言うのであった。

「だから何が何なのよ」

「何が何なのって」

「そのカボチャ食べるだけじゃない。変なカルロス」

「そもそも僕はその」

彼がカルロスという名前に対しても何か言おうとした。丁度その時だった。

「ああ、やっと見つけたよ」

不意にこの言葉が聞こえてきたのだった。

「ここだったんだね皆、探したよ」

「探した!？」

「それにこの声は」

皆その声を聞いて一斉にその声がした方に顔を向けた。するとそこにいたのは何と。

彼であった。見れば狼男の格好をしている。耳は狼の耳を飾りにつけて尻尾を生やしわざと牙をつけている。狼の前足に模した手袋にはちゃんと爪まで生えている。浅黒い顔の陽気な顔立ちの男の子であった。

「あれっ、カルロス!？」

「他の誰に見えるんだよ」

その男の子は目を丸くさせるサエコに対して牙が生えた笑顔で言ってきた。

「僕はこの世界で一人だよ」

「二人じゃなくて!？」

「一人だよ」

その目を丸くさせたサエコにまた言う。

「何があってもね。一人だよ」

「おい、それだったらよ」

ビルがここでその狼男のカルロスに対して問うてきた。

「聞きたいことがあるぞ」

「何だい？」

「野茂英雄の日本での背番号は何番だ？」

このことを彼に尋ねるのだった。

「あとイチローだ。両方共何番だ？」

「野茂が十一番でイチローが五十一番だよね」

「そうだ。その通りだ」

ビルは彼が淀みなく答えてきたのを聞いて納得した顔で頷いた。そうしてそのうえで皆に対して言うのであった。

「本物みたいだぞ」

「確かにね。カルロスだから知ってることだよ」

ビルの言葉にリンチェンもまた納得した顔で頷いたのであった。

「野茂やイチローの日本時代のことを知ってるなんてね」

「近鉄バファローズとオリックスブルーウェーブだったね」

狼男のカルロスは今度は問われもしないうちに皆に述べてきた。

「二人のいたチームはね」

「やっぱりね。間違いない」

ボブも今の彼の言葉を聞いて納得した顔で頷いた。

「カルロスだよ。間違いないよ」

「そうね」

最後にサエコもそれを確信したのであった。

「確実にカルロスね」

「ああ、そうだよ」

「カルロスで間違いないよ」

「そういえば表情もそんな感じだし」

「だから皆何言ってるんだよ」

当のカルロスだけはどうにも除け者にされた感じがしてどうにもいたたまれないのであった。

「僕は僕だよ。確かに狼男の格好をしているけれどさ」

「それじゃあよ」

ここで不穏な顔を見せてきたサエコであった。

「あんたは今ここにいるわよね」

「うん」

まだ何が何だか全くわからないままサエコのその言葉に頷いた。

「ちゃんとね。ここはね」

「それはいいわ」

とりあえずそれはまた納得したサエコであった。

「それじゃあよ」

「何が言いたいの？」

「あんたがここにいて」

しつこいまでにこのことを繰り返して言う。

「じゃあこの人は？」

「この人はって？」

「だからこの人よ」

そのカボチャ頭をこれ以上はないという程不審な目で見つつの言葉であった。

「この人は。誰なのよ」

「ああ、そういえばそうだね」

入ったばかりのカルロスは相変わらず呑気な様子で応える。しかし彼以外の皆はそのカボチャ頭を不審極まる目で見続けているのであった。

「それ。誰なの？」

「あんた誰なの？」

いぶかしむ目でカボチャ頭に対して問うサエコであった。

「一体。誰なのよ」

「今までずっとカルロスだと思っていたけれど」

「そういえば様子がおかしかったような」

「そうだね」

リンチェンとビル、ボブもそれぞれ言う。

「だったらこの人って一体」

「何処の誰なんだか」

「若しかして不審者とか？」

「不審者！？とんでもないよ」

今まで周りに剣呑な目で見られて小さくなっていたカボチャ頭がたまりかねたように言ってきた。

「僕は怪しい者じゃないよ。れっきとしたオズの国の住人だよ」

「オズの国！？」

「今オズの国って」

「そうだよ。僕はジャックっていうんだよ」

ここで遂に自分の名前を名乗ったカボチャ頭であった。

「カボチャ頭のジャック。それが僕の名前だよ」

「カボチャ頭のジャックって」

「まさか」

「そうだよ。オズの国にいる」

彼自身の言葉である。

「それなんだけれど」

「オズの国!？」

「あれって架空の世界じゃない」

「そうだよ」

五人の少年少女達は口々に言った。彼等にしてみればオズの国というのはあくまでおとぎ話の世界である。ライマン・フランク・ボームが子供達に紹介したとても素敵な国のお話のシリーズである。

「それが何でこの世界に!？」

「しかもあんたが」

「ちよつとね。魔法の靴でね」

「魔法の靴ってドロシーの!？」

その魔法の靴が何なのかすぐにわかったサエコであった。

「あれ!？ひよつとして」

「そう、あれ」

ジャックも答える。

「あれを改良して行き帰りができるようになったものただけれど。それを使ってね」

「こつちの世界に来たっていつの?」

「そうということ」

彼自身の言葉である。あくまで。

「それでこつちの世界に来ただけれど」

「それで私達が納得すると思う?」

サエコは顔を顰めさせてジャックに問うてきた。

第四章

「そんな話で」

「けれど実際にここに来たし」

「大体それが信じられないのよ」

彼女が言うのはそういうことだった。

「それで普通に來たって言うけれど」

「うん」

「オズの世界よ、オズの世界」

そこを何度も強調するのだった。

「そんなおとぎの世界からどうやってこの世界に來たっていうのよ」

「オズの世界は実際にあるし」

「あるわけないわよ」

その可能性を頭から完全否定するのであった。

「あつてたまるものですか。そんな世界が」

「何で信じてくれないのかな」

「大体証拠は？」

悲しい顔になってそのカボチャ頭を俯けさせるジャックに対して

さらに問う。

「証拠はあるの？証拠は」

「証拠って？」

「だから証拠よ」

言葉が強いものになっていた。

「証拠。あんたがオズの世界から來たっていう証拠は」

「これだけけど」

その言葉に應えて自分の足の先を皆に見せるのだった。

「これ。ほら」

「その靴ね」

「ほら、紫で綺麗な色してるよね」

「ええ、まあね」

サエコが五人を代表して彼の受け答えをしていた。男の子達はジヤックの話が信じられないのとそのサエコの言葉のテンポの速さが凄いので話に入れないのである。

「これがそうなんだよ。魔法の靴でね」

「その靴がそうだっていうのね」

「うん。何ならこれでオズの国にどうかね」

「冗談でしょ」

ジヤックのその言葉は頭から信用しないサエコであった。

「あなたの言葉が全然信じられないのにその言葉について行くと思
う?」

「そう言われるとやっぱり」

「そういうことよ」

言葉がきつい感じになっていた。

「今のままじゃ絶対について行かないからね」

「困ったなあ。信じてくれないなんて」

「信じられる訳ないじゃない」

そのきつい言葉が続けられる。

「証拠としてはあまりにも弱いわよ、その靴は」

「じゃあ何をやったら信じられるの?」

「自分で考えなさい」

実に冷たい言葉であった。とにかく彼の言葉を全く信じていないのがわかる。

「そんなことは。それを私達に見せてくれたら信じてあげてもいい
わ」

「それだったら。やっぱり」

困った声で考えながらの言葉であった。

「これかな」

「んっ!？」

「何するのかな」

男の子達はジャックのここでの動きを見て声をあげた。彼は自分の頭にその両手を添えてきたのである。そうした彼が次にした行動は。

「ええっ!?!」

「頭を!?!」

「本でもちゃんとやってたけれど」

ジャックはその困った声で驚く皆に述べるのだった。

「こういうのって。だから僕の頭はカボチャなんだよ」

「それは知ってるよ」

「それでもだよ」

皆は驚いた声で彼に対して言うのであった。

「そんな。頭を外すなんて」

「ここで」

「新しいカボチャの頭に付け替えることもできるよ」

そのことも皆に言うのであった。

「ちゃんとね」

「ちゃんとねって」

「頭、本当に外すなんて」

「けれどこれでわかってもらえたよね」

その外した頭を皆に回して尋ねる。声はちゃんとその頭から聞こえてきていた。

「僕がそのカボチャ頭のジャックだって」

「まあね」

不本意といった声であったが頷きはするサエコだった。

「わかったよ。幾ら何でも」

「僕も。やっぱり」

「僕も」

そして四人の男の子達もそれは同じだった。やはり外れてそのうえで言葉を出せるカボチャ頭を見ては信じるしかなかった。ましてその首には何も無いのだから。

「本当に信じるから」

「これでね」

「信じてもらえて嬉しいよ」

彼等のそうした言葉を聞いてようやくほっとした声になるジャックであった。

「これでね。僕がジャックだってね」

「本当にオズの国から来たのね」

サエコが次に考えたのはこのことだった。

第五章

「またどうしてなの?ここに」

「ここが好きだから」

「好きって!?!」

「この世界が!?!」

「うん、そうだよ」

こう皆の問いに答えるのだった。

「楽しいからね」

「楽しいねえ」

「まあ確かにね」

「それはね」

皆もジャツクのその言葉には頷いた。何しろ今の今までハロウィンを中心に楽しんでいるのだからその楽しみを堪能しきっているからであった。

「楽しいことは楽しいね」

「だから来たの」

「僕は笑顔が大好きなんだ」

ジャツクはこうも言った。

「笑顔がね」

「笑顔がなの」

「皆の笑顔が大好きなんだよ」

また言ってきた。

「明るく楽しく笑う笑顔がね。だからここに来たんだよ」

「ハロウィンに!?!」

「お祭りがあれば大抵ね」

「そうね。お祭りだとあなたの格好実際に見るし」

サエコはジャツクの姿を上から下までじっくりと見回したうえで彼に述べた。

「普通にいれば誰も気付かないわ」

「うん。だから僕も来るんだ」

「ばれないからであった。この辺りは意外としっかりしていた。

「この世界にね」

「それで楽しむのね」

「そういうこと。楽しいよ」

声に笑いが入っていた。見れば顔もそんなふうに見えてきていた。

「この世界ってね」

「で、今日もずっと楽しみたいのね」

サエコはここまで話を聞いたうえでジャックに尋ねてきた。

「ハロウインを」

「駄目かな」

ジャックは今のサエコの問いには言葉を曇らせた。

「それって。やっぱり」

「私は別に」

だがサエコは彼に不安げな声にこう返すのであった。

「いいわよ」

「いいの!？」

「カボチャ頭のジャックは知ってるし」

彼自体についてはもうアメリカどころか世界中でよく知られている。それこそ子供だけでなく大人までである。それだけオズの世界が知られているということだ。

「どんな性格なのかもね」

「そうなんだ」

「はつきり言って有名人よ」

「このことも言うサエコだった。

「だからね。私は知ってるから」

「いいんだね」

「私はね」

何故かあえて自分に限定するのであった。

「けれど」

「けれど？」

「皆はどうなの？」

ここでサエコは男の子達に対して問うのであった。

「皆は。どう考えてるの？」

「僕達はってことだよな」

「やっぱり」

「そうよ。皆はどうなの？」

また彼等に問うてきた。

「ジャックと一緒にいていいかしら」

「ああ、そういうことなんだ」

「一緒についてことなんだね」

「そういうこと」

彼女はこのことを重ねて言ってきた。

「それで皆はどうなの？」

「いいんじゃないの？」

最初に答えてきたのはリンチエンだった。

「それで」

「あんたはそれでいいのね」

「僕オズシリーズの本大好きだし」

これが彼の理由であった。

「だから。ジャックがいてもね」

「あんたは賛成ね」

「うん」

「他の皆は？」

「僕もまあ」

「それでいいよ」

ビルとボブもであった。

「実はジャック好きだしね」

「僕も」

二人もリンチェンと同じ理由であった。

「だから。一緒にいてくれるのならね」

「是非」

「これで四人ね」

「いや、五人だよ」

最後にカルロスが手を挙げてきた。

第六章

「僕も。賛成」

「あんたもなのね」

「だって。こんなことって滅多にないよ」

彼は満面の笑顔でサエコに述べるのであった。

「カボチャ頭のジャックと一緒にいてくれるなんてね」

「まあそれもその通りね」

そもそも有り得ないことである。だがサエコはここではそこまで言わないのであった。ただカルロスのその言葉に頷くだけである。

「じゃあ皆賛成なのね」

「その通り」

「異議なし」

また答えが返って来た。

「じゃあ僕は」

「実はこちらからも御願い」

「一緒にいてくれるかな」

「是非」

五人でジャックに対して言ってきた。

「ジャックと一緒にいられるなんて夢みたいだよ」

「つていうか本当におとぎ話!？」

「だよねえ」

顔を見合わせて笑顔で言い合っていた。

「ハロウィンって何が起こるか分からないって言われてるけれど」

「それでもこんなのってないから」

「皆、そんなに喜んでくれるなんて」

「だってねえ」

「話がわかればやっぱり」

「カボチャ頭のジャックだし」

「僕だからなの」

ジャックは自分だからと言われてさらに言葉を明るくさせたのだ。
「た。」

「僕だから。いいの」

「そうよ。あんただからよ」

サエコがまた彼に言った。

「あんただから皆いいのよ。わかる?」

「何か。その言葉って」

「嬉しいの?」

「嬉しくない筈ないじゃない」

これまで以上に明るい声で言うジャックだった。

「だって。皆にそう言われるのがやっぱり」

「嬉しいからなのね」

「誰だって誰かに好かれて愛されるのが一番だよ」

ジャックは心からの言葉を述べるのだった。

「違うかな。やっぱり」

「それは確かにね」

「そうだよ。やっぱり」

「嫌われるよりはずっといいよ」

サエコだけでなく男の子達もジャックのその言葉に頷いて言い合
うのだった。

「そうじゃない。皆僕を好きでいてくれるから」

「言っておくけれどそれは私達だけじゃないわよ」

「えっ!？」

「大体あんたオズの国でも人気者じゃない」

これもまたここにいる五人全員が知っていることであつた。ジャ
ックはオズの国においては国家元首であるオズマ姫の大切な友人の
一人であると共にかかしやブリキの木こり、臆病ライオンと並ぶ大
の人気者なのだ。流石にドロシーは別格で彼女の次に来るがそれ
もなのだ。

「そつでしょ？」
「それはそつだけれど」
「こつちの世界でも人気なのが嬉しいのね」
「そついうことなんだ」
ジャックはサエコの言葉に対してまた頷いて答えた。
「やっぱり。この世界でも僕は誰かに好かれていたら嬉しいよ」
「こつちの世界も好きだからなのね」
「一番嬉しいのは僕が好きの人に好かれること」
ジャックはまた言った。
「だからね。それだから」
「それじゃあそれをもつと確かめてみる？」
「もつとつて？」
「私達と一緒に来て」
「今までみたいに？」
「そつ、今までみたいに」
こつちジャックに言うのである。
「家を回しましょう。そつすればもつとわかるわよ」
「もつと。わかるんだ」
「そつよ。あんたがどれだけ人気があるのかね」
にこりと笑つて彼に告げるのであった。
「どう？一緒に行く？」
「うん」
ジャックは彼女の今の言葉にこくりと頷いて答えるのだった。
「それじゃあ。一緒にね」
「行きましょう。けれどあんたお菓子はい」
「ああ、それはいいから」
お菓子はいいというのであった。
「僕は何も食べなくても全く平気だから」
「そつだったわよね。確か」
「そつちは本当に平気なんだ」

そのことをあらためて言うのであった。

「だって僕力ボチャ頭だし」

「じゃあ悪いけれどお菓子は」

「うん、いいよ」

声でにこりと笑っていた。

「それは君達で食べてよ。僕のはいいから」

「何かここでわかったよね」

「そうだね」

ボブはリンチェンの今の言葉に頷いた。

「よく見たらさつきから何も食べていないし」

「カルロスだったら今頃ガツガツ食べているからね」

「ちえっ、ガツガツっていうのは余計だよ」

当のカルロスはその言葉に不平を言うのだった。

「それでも。ジャックがお菓子を食べないのは有り難いね」

「そうだね。こう言ったら何だけれど」

ビルは言葉を少し歯切れの悪いものにさせていたがそれでも言うのだった。

「それだけ僕達が食べられるし」

「そうね。まあとにかく」

ここでまたサエコが言った。

「ジャックも皆も行きましょう」

「うん、それじゃあ」

「そういうことで」

ジャックも男の子達も彼女に伝えてベンチから立ち上がったのだった。サエコはジャックを皆の先頭に押し立ててそのうえで彼に對して言った。

「あんたが先頭よ」

「僕が先頭なんだ」

「だってそうじゃない」

自分が先頭に立てられて少し驚いた声をあげるジャックに對して

述べた。

「あなたの人気をこっちの世界でも確かめる為のものなのよ」

「うん」

「だったら当然じゃない」

「こっちジャックに言うのだった。」

「そうでしょ？あなたが先頭に出なくてどうするのよ」

「それもそうか」

「そうよ」

またジャックに対して言った。

「わかったわね。それじゃあ」

「うん。じゃあお菓子は皆でね」

「それはね。またそれで」

それはそれで嬉しいことだが今はあえて言わないのだった。

「とにかく。あなたが先頭よ」

「うん、わかったよ」

遂にジャックもそれで頷くのだった。それだけでその大きなオレ
ンジのカボチャ頭が縦に揺れる。いささか落ちそうであるがそれ
も落ちはしなかった。

第七章

「じゃあ。行こう」

「トリックザトリート」

サエコだけでなく皆の言葉であった。

「それでわかったわね」

「そう言っ出てるのはわかってるよ」

これはジャックもよく知っていた。

「それはね」

「じゃあ話が早いわ。それじゃあね」

「うん、皆どんな顔してくれるかな」

ジャックは笑顔で五人と一緒に家を訪問しようと思うのだった。

そのカボチャ頭は本当は笑顔にはならない筈なのに今は何故かそう見ているのだった。

「喜んでくれるかな。楽しんでくれるかな」

「ちよっとジャック」

「それは違うよ」

だがここで五人が笑って今のジャックの言葉を訂正するのだった。

「だって。ハロウィンだよ」

「だから」

「あっ、そうか」

彼も言われてそれに気付くのがだった。

「そうだよね。驚かすんだったよね」

「そうだよ。わかったら」

「行こう」

「うん。皆を驚かしにね」

「そうそう」

「あんたがね」

「皆を」

実はその皆という言葉だけ聞いているジャックだった。

「皆に会えるんだ。何だか」

そのことを思うとどうしても声が笑ってしまうジャックだった。そうして家々でジャックだジャックだと笑顔で迎えられたこのハロウィンには彼にとって実にいいものになった。

その楽しいハロウィンも終わってお別れの時間になった。ジャックは夜の蛍光灯の下で五人の少年少女に対して言うのであった。

「今日は有り難うね」

「ええ、楽しかったわ」

「ジャックのおかげだね」

「僕のおかげだなんて」

その言葉にまた笑顔になるジャックだった。

「そんな。僕は何も」

「何言ってるのよ、最高のハロウィンだったわよ」

サエコが彼に笑顔で述べる。

「だからね。また会いたいわ」

「僕も」

「僕もだよ」

四人の少年達もそれは同じであった。

「だからね。よかったら」

「また来てね」

「うん。絶対にまたここに来るよ」

ジャックもまた上機嫌で彼等に言葉を返すのだった。

「またね。けれど」

「けれど？」

「どうしたの？」

「君達もオズの国に来て欲しいな」

彼はこう五人に言うのであった。

「是非ね。オズの国に来てよ」

「行けたらね」

サエコがまた五人を代表して述べた。

「行くわ。けれど」

「行き方がわからないっていうの？」

「だって。おとぎの国じゃない」

彼女が言うのはそこだった。

「どうやって行けばいいのよ」

「そうだよ。本当に」

「ジャックはその魔法の靴があるからいいけれど僕達は」

「ああ、それなら簡単だよ」

ところが彼はここで笑って五人に言うのだった。

「簡単な方法があるから」

「方法って!？」

「どんなの？」

「だから。カンザスでね」

ドロシーの故郷である。彼女は二回程度オズの国からカンザスに帰っているが今ではヘンリーおじさんやエムおばさんと一緒にオズの国で暮らしている。そこでオズマ姫の第一の親友、相談役としてオズの国で楽しく過ごしているのである。

「小屋に入って竜巻にさらわれたら」

「それでオズの国に行けるの？」

「そうだよ。多分ね」

今一つ頼りないジャックの返事だった。

「だから。来てよ」

「その方法じゃ何かそのまま大変なことになりそうだから駄目だよ」

「だからジャックがまた来てよ。いいよね」

「皆にもオズの国に来てもらいたいんだけどな」

竜巻で行く方法を拒まれてそれに頂垂れるジャックだった。

「仕方がないや。今は僕が毎年ここに来るからね」

「ええ、それを待ってるわよ」

「来年もね」

何はともあれこのことは楽しみに招待された。こうしてジャックは毎年ハロウィンになるとオズの国からこちらの世界に来ることになったのだった。今もこうしてハロウィンになるとジャックが子供達に混ざって楽しく笑っているのが見られる。そう、殆どの人がそのことに気付かないだけで。

ハロウィン 完

2008・12・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8428f/>

ハロウィン

2010年10月8日15時59分発行